

# 自動人形とテクノロジー

『メトセラへ還れ』を通して見る機械の身体

松本望希

## 1. はじめに

本研究の目的は、バーナード・ショー『メトセラへ還れ』(1921)に登場する2体の自動人形、オジマンディアスとクレオパトラおよび、彼らの「死」に注目し、彼らが登場する第五部を中心に、テクノロジーの発展により変容する人間性というものをショーがどのように描いていたのかを明らかにすることである。

アダムとイヴの時代から始まり、紀元31,920年の未来社会に至る広大な時間軸の中で展開される本作品は、人間の寿命が300歳まで延びた結果もたらされる、社会の変容について描く。物語の最終部「思想の達しうる限り」において、人間は800歳を超えて生きようになり、そうした長寿社会は完全に実現することとなる。だがそこは、人間は4歳で成人を迎えたのち、政治や恋愛には興味を失い、睡眠をとらずに裸であてもなく歩き回るというような、およそ理想的とは言いがたい世界として提示される。ここで注目したいのは、物語の終盤に突如として出現する自動人形である。長寿を主題とする本作品において、一見すると物語の本筋とは関わりのないように思われる2体の自動人形たちに注目することによって、20世紀初頭の英国社会においてショーが、人間の身体や精神に「侵入」する機械のありさまについてどのように提示しているのか明らかにする。

## 2. 「人間」と「人形」

『メトセラへ還れ』において、自動人形たちは、3歳の長寿人である科学者ピグマリオンによって作られ、実験室での試行錯誤を何度も経た結果、死んだ細胞に高位の電流を通して作られる。彼らは、外部からの刺激に反応するだけで何も創造的なことはできない一方で、完全に機械的な存在とは言えない。ピグマリオンは、彼らに話し方や読み書きを教え、今では嘘までつくようになったと、長寿人の一人マーテラスに生きた人間のような創造性を自慢する。

一見すると一貫したあらすじを持たない『メトセラへ還れ』であるが、「死」という問題には繰り返し言及される。「生きている人間」ではないはずの自動人形には、しかし死は訪れないはずだが、彼らは死ぬことを恐怖する。反対に、人間であるはずの長寿人たちは死を恐れず、むしろ肉体を捨て魂が不滅となることを悟る。彼らは最終的に音楽が流れる中、「生きることに疲れた」と言いながら死んでいく。このような自動人形たちの姿からは、「死」というものを経験することで、逆説的に人間性の片鱗を見出すことができるようにも思われる。あまりにも人間的なふるまいを見せる自動人形の姿を通して、ショーが問いかけるのは、彼らのどういった役割なのだろうか。

Glenn Clifton は、「魂のないロボット」である自動人形の中にショーの同時代批判を見出す(120)。Cliftonによると、長寿人たちに長寿社会の感想を尋ねられても、「今日の新聞を読んでいないからわからない」としか答えられない自動人形を、流言に心動かされ自分の意見を新聞に頼る、傲慢な20世紀人のパロディーとして見るができると言う。だが自動人形たちは、単なるパロディーとして捉えるには、あまりに機械的なプロセスを経て作り出されている。自制心を持たず、刺激に反応するだけの人形であるはずの彼らは、非常に人間的な思考を行う。それならば、本作品に描かれる「人間」と「人形」、あるいは「機械」との境界はどこに見出すことができるのだろうか。作中、長寿人と自動人形は対照的に提示されるが、実際にその境界を見出すことは困難である。ピグマリオンが、両者の区別はつけがたく、新たに生まれた長寿人アマリスの4分の3は自動人形であると主張するように、生きた人間である彼らのほうがきわめて自動人形的な性質を備えるのである。自動人形たちの表象から、われわれが読み取ることができるのは、同時代人への諷刺というよりも、むしろ人間と人形、あるいは機械との境界という問題について取り組むショーの姿であるように思われる。

## 3. テクノロジーと人間性の変容

人類は、古代よりさまざまな道具及びテクノロジーを発明することで、自らの能力を拡張させてきたといえる。だが、次第にテクノロジーは人間の生活の中に「侵入」し始める。1829年トーマス・カーライルが、「時代の徴候」において、19世紀を「機械の時代」(64)と形容し、人間の手仕事が機械に置き換えられていくありさまを論じたように、テクノロジーの発展は人間からそれまでの生活のあり方を奪うものとしても機能する。それだけでなく、テクノロジーは人間の身体や精神という領域にも「侵入」し始める。特に第一次世界大戦においては、今までにない威力をもった兵器の登場により、傷ついた兵士の数が増加すると同時に、それを補綴

し戦争により断片化した身体を、再び元の状態にする医療テクノロジーも発達した。1948年には数学者ノーバート・ウィーナーが、人間と機械を統合する理論、サイバネティクスを創始した。そこからは、機械に身体を補綴された人間、サイボーグが見出され、ウィリアム・ギブスン『ニューロマンサー』(1984)をはじめとしたサイバーパンク作品につながっていく。たとえばウォシャウスキー兄弟による映画『マトリックス』(1999)においては、人間はコンピューターに接続されその動力源としてのみ活用されるという時代の到来が描かれる。そこでは、機械に侵入された身体は、もはや主体としての立場を失う。人間は最終的に、機械の客体としての存在に成り代わってしまうというさまが描かれるのである。こうした状況は、人間のクローンや人工知能など、テクノロジーがわれわれの身体のみならず、より深く精神にまで干渉するようになった現代の世界において、無視することはできないように思われる。

本作品の第一部「太初に」では、アダムとイヴは、蛇から「不滅」や「希望」といった、新たな言葉や概念を学ぶ。だが、それから数十世紀が経過した第四部「老紳士の悲劇」においては、短命人である老紳士が、同じ英語を話しているのにもかかわらず長命人であるズーの言葉を理解できないという場面が描かれる。第一部と四部の対比からは、カインが殺人を「発明」した第一部から、電話のようなテクノロジーが登場するようになった第四部という長い時間の経過を見出すことができるが、物語の中では、それに伴い、テクノロジーの発展が描かれていく。第三部には、テレビ電話のように遠くにいる人と顔を見ながら話すことのできる機械が描かれます。また第四部において、老紳士を保護するために、別の長寿人を呼ぼうとするズーが音叉を用いて話している様子は、コンマやピリオドが用いられない、非常に奇妙な形で表記されるのである。時代の経過の中で発展を遂げたテクノロジーの産物は、やがてコミュニケーションのあり方や人間の考え方に影響を及ぼすものとして提示されるのである。

ショーが2体の自動人形という存在を描き出したのは、現実においてもフィクションにおいても、機械が生体の領域に「侵入」し始めた時代であり、機械的な身体への関心が高まった時代であるといえるだろう。有機的な生命体と人工的な人形との境界が、前時代よりも曖昧になってきているのが、この20世紀という時代であり、その途上において本作品は生み出されたのである。

#### 4. 結論

自動人形たちは、人間であるはずの長寿人たちとは反対に、非常に人間らしい振る舞いを見せる。機械である彼らは破壊されない限り動き続けるはずだが、あまりに人間的な死を迎えるため、単なる外部からの刺激に対する反応を見せているだけのように思われぬ。「死」という人間特有の出来事を経験することで、逆説的に自動人形たちは人間性を獲得しているのである。一方、本当の人間であるはずの長寿人たちは、800歳以上の寿命を得た結果、不慮の事故がない限り死ぬことはなく、俗世から超越した存在になっている。そこからわれわれが見出せるのは、機械は人間的な魂をもつのか、それならば、魂とは、人間とは一体何であるかという問題のように思われる。そうした自動人形たちの姿を通して浮かび上がるのは、生きた人間と機械の境界が曖昧となり、両者の間に揺らぎが生じている20世紀初頭という時代である。現実においてもフィクションにおいても、人間の身体および精神に「侵入」し、さらには生体に融合しようとするテクノロジーへの関心が顕著となりつつあった時代において、この『メトセラへ還れ』が著されたのである。そのため、われわれが自動人形から見て取ることができるのは、自らの意思を持たない当時の人々へのショーの批判というだけではない。自動人形たちは、20世紀人のパロディーという役割に留まらず、テクノロジーの発展が人間性を変容させていく、まさにその過渡期にある社会の様子を映し出しているのである。

古代より脈々と続く、自らの似姿を創造したいという人類の欲望は、人工知能やクローンなどの技術が実現しつつある現代においても、いまだに途絶えることはない。ロボットやアンドロイドなど、広く機械的な身体について描く物語の中にこの『メトセラへ還れ』を位置づけることで、人間性というものが一体何なのかということを追求するショーの姿を見出すことができる。第一次大戦終戦直後の20世紀初頭という時代にあって、ショーがこうした作品を著したことは、テクノロジーがより一層深く生体の中に侵入し続けている100年後の世界に生きるわれわれにとっても、人間性の変容という問題をより切実なものとしているようにも思われる。

#### 参考文献

Carlyle, Thomas. "Sings of the Times." *Selected Essays*. Ed. Alan Shelston, Penguin, 1986. 59-86.

Clifton, Glenn. "An Imperfect Butlerite Aging and Embodiment in *Back to Methuselah*." *Shaw*, Vol. 34, no.1, 2014, 108-26.

Shaw, Bernard. *Back to Methuselah: A Metabiological Pentateuch*. Penguin, 1974.